



明治十年
第百六拾號

愛知県文化会館

410129

112/45
33
410129

以り安んぬれとて是れを以て
世に傳へしやう山をなれ
金井桂立うさねの妻よ
ありあけきつてあは馬相如く

職官印

あやあやと申し〜に細井喜幸天冊
布川は託してその門人紀六木のうつ〜とる
全本をあつくりまじり〜とけるに〜ら
みま〜と〜と〜と〜とみ様の〜と
命〜と世にを世ま〜と〜と乃
文よと〜とや銘をま〜と〜と〜と
あ〜とをま〜と〜と〜と人のふと
うつ〜と方の外よお〜と〜と乃

う年一

百むむい〜と〜と〜と〜と
てら〜と〜と〜と〜と
は〜とやあ〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と
け〜と〜と〜と〜と

四山人

我汝よ公をかりて汝我よ別くもつる乃れ妹姿をあら
く一人よかりてありあはれ

袴どつる日ハヤもまぢる園うね

蓼花巷記

一市との芭蕉を株の柳乃其人の使てらされく
枯ぬ名をとくやもあつに不仕合ある校本ある傍正の
号よ呼ばくほわみ冬々の怒とくつりあは切乾極地の
名とさく漢一とむ我劍冠乃仕途よ才とさるあつ一の
陽家ありこれを蓼花巷と名つく蓼花巷かむつりま
いハあはれと夕日乾雲の氣も公申くもつりその一市と
乃申りあつあもあはれ松茸さよの多きけと俊成

々乃座をかむあつりく世よといつるさあはわいけ
あれとつりくこ世を名とせりともけ幽栖をわかの柳
よとつりく山よ向ひ海よまひにあり世あり月雪花を六
四の時の詠を供一時々あは松の夕風竹の秋雨の音までも
まへからとらほそらみとわきみのあはれ母市と出く遠
つりくと人よ杖よ鞋をわくとらむとせとせとく方士
まあはふと出とくとも之端の山やと杖まも門よ迷ひくあを
のさあとのを孤か化されうけの山さきの石よまき人あり
あつてつりい桃源は棹さとてくあはむとて杖のあは
番もつりてあつりいよへき人あはく今もま入まらる
あつらん茅門よあはれとちり

物をさきの虫はまてあはれ蓼の花

神子わよむ張子うるとと懐ちらるるこころこころおひく
感ありつあふち短の解をつくりてととむらよの詞井
か其辞のちとこころおまこオのまうれおあし

本履説

本履いと並ハ東坡りまのせしけの尻ふちうらおふあ
へきにましく中汝ハ友の日の字幸予杖ふも産れれさる甲お
つきて隙ちる時ハ極の下ヲ赫こころい黄のそお歌とも
あひ又ハ友の杖ふさくはこころ日の初あやらつきてハ
こころまてれ月ともんこころむしあくとほまのつみ
こころりまうれこころに人ととあうれ子もあれと常ハ
常あまにひさゆつき澄澄の日のこころけとありてこれ

より人の交ハちとかく下さぬのそのちと狩人乃
笛とありてハ口ふちとこころもまよ中との麻の糸
を断るハ罪ちと心の果あれと傳も下結もあし一本の
ききて例の一体のちこころまてとこころと結止の老婦
おきれてん抑足さきものこ本履足結く号しこころけ
低きと下結といつらいつれ一体を分ちてこころま界の
差別ハあわと俳諧のこころよこの姿と論をへくハ
あつとくと辞ちる君達の朝あつて下結くとわそ
こころり雨のうねあし

ち羽繪焚

蝦蟇の息は虹と起し唇はよく様臺と吐後申の虫

氣を鳴く声を出さずもまゝにあや—きよさあはるへうは
くさあもあゝのあや—あのみんよわねのま所のちや—
りまそまき筋これとつ—みくく—公界の晴とくは
されと証とく晴あつ—もはけ海沿まきふカー—り
あ—もこのやあまゝんその晴—こと不平あもつきん
々盛親僧の茅の夜味あふま飯あふり女まのさ食
ままそりね勢ひこくに甚—あ—をま記のき程得ま
ち—さしてまごゆり—あゝるよりつあふ種余も喫つけ
られとて七の説法屁一つは破れとちねとけくハ賀々朝
後基の尻肩ひは丘尼とあゝまらまら—ハ雑混森の
くらりふち—あゝあ音—そ句へまことふ人ハよこまを
—さあま音相の信正乃まあ—もりこ—まらわねの—

あゝはらの音あれとも月まえはあまあゝあゝあゝ
あゝのハ更々電光石火ままわらゝとあて人まらゝ
世のこつりりまあゝ—あゝとらゝ—

摺新傳

坊あのかつてのしとりのあ女ありあ田さうひあねをま
あうり姿ハ名まき富士の侍よりあひく片山里に朽
まそん刃まきまきのまやせひまをくんるあのはようけて
まそく旅の市中よ出てくるま—あゝ店先まあ—たつき
まらゝあらうに解まのやわを—くあのはまこ風のままひ
まははハ世も煤掃のままこまてまてあゝあゝあゝあゝ
まつれとある甚やまきまあゝ—まはの極ま—摺本

とやへーかへにうらなまのま姫とはうらなまのれを
柏木のちまつとも似も松木のあまのうらなまの男のうらなま
かまなりあまき舞うらのゆめやうらなまの女もんや茶も
好く明くれつとて紅つともねわうらなまのうらなま
とて白らへのをりてくまて糊茶のまのれ女中と
折ひあかきさうらなまのりりりまの比せうらなまの
一おのこは替のまれば自細うらなまの深やまのまきう昔ハ
御所まうらなまの名も呼びつとあうらなまの女
やうらなまのまのれこらぬらなまのうらなまのまのれ
固ふかきうらなまのまのれまのまのれまのまのれ
あま同様の口まのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
地獄まのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ

あらねやまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
くまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
耻まのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
うらなまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
は棚のまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
まのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
あまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
の中まのれまのまのれまのまのれまのまのれ
おのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
味好くまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
うらなまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ
一ふりまのまのれまのまのれまのまのれまのまのれ

餅辞

君ももも餅の例のおーとありてきつても四時の儀は
ありよりハトとそれ初言松も竹もあつてさるあつては
飯ハカより老短うしてあつ茶麩類もあつてけさの
世と新煮と趣向を定あつてを秋代の骨折のとき
あるーとそれより具足かといひき餅は睦月のとき
られ二月ハ彼岸の赤子をそ花なりとよみ一人も
ありーと茶餅の赤餅は桃もちりつーと山竹や
かけ餅もよはんちり煮の餅も初つてくやん餅
墨を呼れとまき雨つれくとり出ははかき餅の餅
焼もさかのたを返る取世もあつてを餅は卯月を

例の卯花のかりと飯をのきもさつーとや餅は餅
からつてはハ牡丹餅の花りとむさく子園子とき
ーとーとや餅はのまにさるーとーと餅
ちと飯の白い又ありーとを月の餅ハ氷餅とてま
あま上りつてくまきと餅ーとあまをなちもようはく
古用の比水餅の錫餅まうらひ出らるとよすのま
はーとさるりくと同じも月のまられーと七ツ乃
あか歌ハみねのまもく子の子の餅もまのまぬハ葛餅
乃とみあつてその餅はーとよかーもやちちとまけ
申ーと還ちつりも赤子あつてをておれ秋の花ハ餅も
しけくとちちちち月の赤子より要れ子餅の赤いも
それと十月ハちちよりまの子の餅もまを和つて時西に

乃そきまのあま天降のわくのちき解ちたりしうま何事
うらへーやて佛のかりおめら比つりる粉をもちま
ちきもちあつたも酒の名のこふあつた和とふの解ハ新の
りしめく呼走ハふて解の世界をあれとあけてもりし
へうけなれをよりあれて詩人ハ酒のこ友まうとて入世
く事柱と守り解の海はちうれと友記を全ハ俳諧
まハ劉伯倫のこあけも友輝再の解は行ちうもとも
丹俳諧の趣向をれと我門ハハ上戸もあつてく下戸も
控さつて

思付

わいハ佛のまは作し余利とあまみし科まうまふ之

穿人の影よりてまうとくまうとく思ハ十八のあつて
をより楊半之処の標まふのく種煙とらるる松田男は遊れ
かくれ善の方も信うとや十郎姉も引うれ赤裸ま
う代くくみくくうてゆへんあつとせれ出れる
とやまははつて涙ちうくやあつと朝相、まの程な
まうたりて一せんを教くまうまうまうに横をぢ
ぬの行者の情ちうく大早うらぬのちあはちう肩りれ
しははははあつてくちうて奈解もあつてくちうて
芥川のくちうきれは思一口のあつちうきむし男と後を
それのこあつて後藤山のぬ色大い山の碎ねうはふま
世にさうちうちう九砂屋うりは後藤も思のあつちうち
世にち躍ちうちうちを社ちのちうちうちうちうの責

うつろくとまゑをききみそ花おののちちのいふも松母
 を明の孫とむむの祢をまゝとておのこ起ていふも
 ちりへりれいつものまゝ智うの声打こて車井の走
 ちと花の輝くみよあつまり暗うと迷国の壁にくぬ
 おりもまゝときわりの声よ拘つれと雨戸一本に
 あけられたるは四つはまもくけさくまゝらねとるま
 ののみまゝまゝおのいさちりうくさちりくとのま
 のまにうりものゆゑにわつてお起てく一目の
 さうとくくさつておまを盛るよう松原におおま
 くとくはくまゝとていふては睡てまをさくま
 ちむさりらまゝに秋の夜をいりて又廻起の面を
 けいさうまゝお起の男と叫へたれて秋夜におも

ちり〜氣をいゆる〜うま〜

ちきとおま〜くさあま母〜娘

炮娘賛

一せとつ〜うらうら〜のり〜ユモ〜〜〜地婦〜
 かの八州おまのり〜ん〜ま〜れ〜も〜の〜徳と論まぬ
 け〜〜〜〜〜鴻文〜に〜眷族も〜く〜ワ〜れ〜〜盛栄被り〜
 早う〜に〜浪に〜毛彫の〜袴〜履〜も〜あ〜り〜教〜奇の〜茶〜盆〜天明
 芦花の〜作〜ま〜〜と〜笛〜身〜探〜遊〜下〜給〜ま〜あ〜い〜え〜ま〜し〜れ
 自身を子のち〜り〜二〜節〜も〜この〜つ〜ろ〜氏族の〜母〜子を〜ま〜り
 ちり〜あ〜へ〜一〜炮娘は〜一〜お〜も〜う〜く〜世〜に〜く〜つ〜ら〜あ〜り〜
 ち〜〜〜と〜す〜盛〜全〜と〜あ〜る〜ま〜茶〜と〜わ〜〜〜と〜雨〜夜〜の〜ま〜い

はひ多々の互たからしと有り射ハ隣のやりの耳
をねとすして中世を為す商人の投朱の投とま
されとも常よりさつしみて細を投擲を大足よこ
そす中中役とわれともさつしみてさつしめて
了士和服の氣路も大似るんあかくへ手ハカ片乃
相言に弱鼓と威勢をさつしみて又ハ歐陽公さま
より糧とらあめと尻さねとせし踊とさつしめて
るれとさつしめてあつてあけあつてさつしめて
り一鼎の辨和人の名とさつしめて川あつてさつし
より端をねと罪ハ動く將るへさつしめて未田屋の
大坂うらひは及中の名を抄さつしめてさつしめて
家重をあらしくさつしめてあつてさつしめてさつし
て

薬落のたにまひさつしめてさつしめて

ほうろくや棚さつしめて秋のそま

偶田川涼賦

あつて月のあつてのさつしめてさつしめて偶田の
川風さつしめてさつしめて牛込さつしめてさつしめて
まつ涼さつしめてさつしめて母は草の音さつしめてさつし
めさつしめて母はかきさつしめて一葉れさつしめてさつし
も場さつしめてさつしめてさつしめてさつしめてさつし
あつてあつてさつしめてさつしめてさつしめてさつし
の格さつしめてさつしめてさつしめてさつしめてさつし
神さつしめてさつしめてさつしめてさつしめてさつし

有りて一箱のあのほ日々一りあもつれめく事と云ふ
此の昔をく火をとあそむと今戸ありり乃
つたねもともつたと解る事行をばらてさのさめく
さうく物女等に四本の座をあるさうさう言に百粒の
ちあといとつたねさう湯に熱きの月も馳まると一
身くつて訊はさるいなく人と一々ねをさう言言放
のふ取のあふと火の走かみらと敷一まををうけ
のねが様焼のさうと花よりと静一草の内のさま
字をうやまありく船共のせしつて衝さくさにああは
物と昔物とのよりをさきねくね物つとね神ま
燭のさきくけりさうく大名の家のさうとねさう
おまねあり女中の居のさうに取ゆさう一取さる坊

ありて一とさう大さのハリさる鳥さあはんとさ
形はのいさうさ川の理屋もささうさうと老人の昔を
今も他をさのいさうさう一役者の声もささうねもさ
うさうさうさう卵あり田舎あり瓜西瓜の味の
長きさうさ声西南にうさうさうさうさうさうさ
風をさうさうねをさうさうね草もさあさうさうさ
静かありさ曲をさありさうさみさうさうさうさ
あささう圓の静もさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
はうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
りさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

乃ちあまのまはるはさしつかちほつてしりあいの全船を
此岸尾甲に抱きしめて菜根咬喰して百事なをへて
後の方船の方人へおまけをうり

魚屋りの事をよむにわけなき

福蓋縁替

むきしつかりの縁替を比あへての店に求め出せる
ものありさうに学やほくく小福の蓋をうりたる
さんハ蓋と釘の縁の入り月かゝる人の片光あり
りさしけしけしあのつらとあはれあひのりさ
りささるは独坊を佛供とや調へて借金の
波の縁とやうさへりむきとさうきとちうりり

表にあまのまはる人まはるりてせつりまふ
あまのまはる一あまのまはるのいふまをりあまの
世に招神よきまあまの親りまとうねハ蓋のこあて
みいりてこま引まねりしめまはるはあまのまはる
あまのまはるのまはるまはるまはるまはるまはる
あまのまはるまはるまはるまはるまはるまはる

あまのまはるまはるまはるまはるまはる

あまのまはるまはるまはるまはる

あまのまはるまはるまはるまはる

あまのまはるまはるまはるまはる

同菊詩

柿葉く〜 菊花のつ〜 花瘦よのつ〜 花のつ〜
赤き〜 白き〜 菊のつ〜 菊のつ〜
の香のよ〜 つれ〜 花のつ〜 花のつ〜
ら世花ハ年〜 菊のつ〜 菊のつ〜
似傳とら〜 菊のつ〜 菊のつ〜
国九州と何〜 菊のつ〜 菊のつ〜
る。花よ起〜 菊のつ〜 菊のつ〜
〜 菊のつ〜 菊のつ〜
朝迎々益〜 菊のつ〜 菊のつ〜
徳まき〜 菊のつ〜 菊のつ〜
このみ〜 菊のつ〜 菊のつ〜

こつろや〜 菊のつ〜 菊のつ〜
ち〜 菊のつ〜 菊のつ〜
〜 菊のつ〜 菊のつ〜
〜 菊のつ〜 菊のつ〜
〜 菊のつ〜 菊のつ〜

我菊や尺より山花のつ〜

俳序と擬

一 飯ハ三石れ持返さる〜

茶の花の比とち〜 茶のつ〜

一 け一ツ葉二ツ酒の香〜 菊のつ〜

〜 菊のつ〜 菊のつ〜
〜 菊のつ〜 菊のつ〜

昔も番もてあつた五三郎の冬を記
一 酒ハ後のお後をさへくさし不益とさへくさし
不益ハ坊屋をさへくさしとゆひてへー

いさふに「さへくさし」村ーんれ
さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし
さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし

一 菓子ハまのあつたに似てまつハお大工は定むへー

お大工はまのあつたに似てまつハお大工は定むへー

一 燈ハ坊打をさへくさしとゆひてへー

坊打ハ坊打をさへくさしとゆひてへー

右へさへくさしとゆひてへーさへくさしとゆひてへー

お大工とあつたに似てまつハお大工は定むへー
さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし
さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし

さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし

お大工とあつたに似てまつハお大工は定むへー

名人傳

天子信天とあつたに似てまつハお大工は定むへー
さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし

世はまのあつたに似てまつハお大工は定むへー
さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし

さへくさし酒をさへくさして四ヶ堂の坊屋をさへくさし

さる冷きも熱きもなほなほとらふてふくしの
あつらひと世にありとらぬ

1770
1771
1772

914.5
CB
410129

914.5
CB
410129